



序

これまで知らなかったことに合うことほどワクワクすることはない。

循環器疾患は画像診断医にとって“ラスト フロンティア”であろう。

最近のジェネラル ラジオロジストは何でもよく知っている。日常診療でまずお目にかかることはない頻度のきわめて低い疾患に関しても、症例検討会での確かな発言をする人達が沢山いることに感心し、時に驚いている。専門は深くきわめ、それ以外の分野でも一通りの知識を持つことが当たり前とする態度が身についている。実に頼もしい。

しかし、多くが循環器疾患を除いてという但し書きをつけての話である。心臓カテーテル、核医学、超音波検査が担当する疾患で、一般画像診断医が症例に触れる機会が少なかったことが主な原因であろう。

CT, MRIの飛躍的な進歩がこの領域の診断に革命をもたらした。動きの激しい臓器であっても対応が可能となり、形態と機能を短時間かつ高精細に描出する。冠動脈の狭窄診断がまずMRIで、そして後にCTで行えるようになり突破口が開かれたのは既に30年も昔のことである。現在の対象疾患は心筋虚血、心筋症、弁膜疾患など多岐に及んでいる。とくに画像診断の特殊小領域ではない。

前述と同じ主旨を『画像診断』2015年7, 8月号 (Vol.35 No.8, 9)の特集“知っておきたい循環器疾患のCT・MRI”の序文に書いたが、それからさらにこの領域の新治療法、補助器具の開発は急で、画像診断の改革、進歩も勢いを増している。

今般、その特集を新たに再整理、加筆訂正を加え上梓する企画を依頼された。この分野に馴染みの薄い放射線科診断医、放射線診療技師、研修医を対象にした循環器画像診断入門書、さらに専門であるも担当分野が多岐に分かれる循環器内科・外科医への最新画像診断解説書の必要性はかねてより理解していた。コンピューター支援診療、AIによる診断の可能性など未知の時代へ移行するという話題が溢れている今日、現時点での最新基本知識確認の重要性をことさらに感じ、お引き受けした。

新たな項目立て、改訂に後任の横山健一教授の協力を得、日本心臓放射線研究会の主たる先生方に改めての執筆をお願いした。本編と一部重複を承知の上、進歩が急である新しい循環器診療デバイスの解説を中心とした付録も付け加えた。

どんなことでも新しいことを学ぶのは楽しい。

ましてやそれが役立つ知識であればこんな楽しいことはない。

本書はそんな新たな世界への招待状である。

2020年春

似鳥俊明